

進路選択時の母娘間コミュニケーションが青年期後期の娘の自己決定感に与える影響

神戸女学院大学大学院 人間科学研究科
博士前期課程2年 生島 京香

I. 問題

青年期における発達課題のひとつに、親への依存からの離脱・独立があり（渡辺, 1997）、青年期は親から自立する時期である。青年期のライフイベントには進学、就職があり、青年期は、進学や就職等の人生に関する自己決定を行う機会が増えると考えられる。自己決定とは、自分のことは自分で決めるという意識やその行動のことであり（岡本, 2018）、自己決定感とは、自己決定している感覚のことである（桜井, 1993）。奥村・森田・青木（2019）は、高校時の進路選択において、進路を自己決定したと認知しているほど、精神的自立を促し、大学生活満足度を高めることを明らかにしている。また、永作・新井（2005）は、自律的に高校進学を行うことがその後の学校適応につながることを示唆している。したがって、自己決定を行うことは、その後の適応や精神的健康に影響を与えている。

青年期は、新たな親子関係を構築するためにも、親子が互いの要求を調整するような新たなコミュニケーションが必要となる（柴田, 2000）。また、青年期の課題にはアイデンティティの確立が挙げられ、杉村（2001）は、アイデンティティの形成の過程を、他者の意見・期待も考慮し、自己と他者の視点の食い違いを解決しながら人生の重要な選択を決定していくことであると定義している。このことより、青年の自己決定には親子間のコミュニケーションが関係しており、互いの意見を調整しながら決定する場合、青年の自己決定感が高まると考えられる。

牛尾（2005）は、就職に関する相談相手として母親が最も選ばれていることや、女子の方が男子よりも親への就職状況の伝達頻度が高いこ

とを明らかにしている。また、女性は母親との依存・絆が比較的強いまま維持され（渡辺, 1997）、母親との距離の近さを保ちながら自立する（水本・山根, 2010）。このことより、青年期の娘において、自己決定に、母親が関係している娘が多いのではないかと考えられる。

II. 目的

本研究では、進路選択時の母娘間コミュニケーションが青年期の娘の自己決定感に与える影響について検討する。自己決定の場面により自己決定のやり方は異なると考えられるため、本研究は、大学卒業後の進路選択場面を設定する。

II-1 目的1

本研究の第一の目的は、娘の母親への親密性と進路選択場面における、母親のコミュニケーションとの関連について検討することである。

仮説1a: 娘の母親への親密性のうち、母親に愛情を与える方向の親密性である「母親への心づかい」が高いほど、母親は、娘の考えや感情を尊重するコミュニケーション、自身の考えを主張するコミュニケーションを行い、会話を避けるコミュニケーションは行わない。

仮説1b: 親から情緒的安定を与えてもらうような親密性である「母親への絶対的安心感」が高いほど、母親は、娘の考えや感情を尊重するコミュニケーションを行い、自身の考えを主張するコミュニケーション、会話を避けるコミュニケーションは行わない。

仮説1c: 母親の価値観に捉われている親密性である「母親の価値観への捉われ」が高いほど、母親は、自身の考えを主張するコミュニケーションを行い、娘の考えや感情を尊重するコミュニケーション、会話を避けるコミュニケーションは行わない。

II-2 目的2

本研究の第二の目的は、進路選択場面におけ

る母親のコミュニケーションと娘のコミュニケーションから、母娘間のコミュニケーションタイプを分類し、娘の自己決定感へ与える影響について検討することである。進路選択時の母親、娘のコミュニケーションそれぞれが娘のアイデンティティとの関連を示している（高橋, 2009）ことより、母親と娘それぞれのコミュニケーションの単独の影響だけでなく、両側面の影響についても検討する必要があると考えられる。自己決定について、青年の自己決定が青年の発達や適応に与える影響については検討されているが、自己決定に影響を与える要素について検討されている研究は少ない。自己決定を行うことは、その後の適応や精神的健康に影響を与えている（奥村他, 2019；永作・新井, 2005）ことより、自己決定感を高める要因について検討することは意義があると考えられる。

仮説 2a：母親と娘がそれぞれの自分の意見をはっきりと伝え、自分と相手の意見の違いを表明し、他者の考えや感情を尊重するコミュニケーションを行うタイプの時、娘の自己決定感が高くなる。

仮説 2b：母親が、自身の考えのみを主張し、娘の意見に理解や支持を示さず、娘が自分の意見をはっきりと伝えず、母親の意見や期待に合わせるコミュニケーションを行うタイプの時、娘の自己決定感は低くなる。

仮説 2c：母親が、自身の考えのみを主張し、娘の意見に理解や支持を示さず、娘が自分の意見をはっきりと伝えず、母親との話し合いを避けるコミュニケーションを行うタイプの時、娘の自己決定感は低くなる。

仮説 2d：母親が娘の考えや感情を尊重し、

娘が自分で決定するコミュニケーションを行うタイプの時、娘の自己決定感が高くなる。

Ⅱ-3 目的 3

本研究の第三の目的は、母親への親密性、進路選択場面における母娘間コミュニケーション、娘の自己決定感の関連についてモデルを検討することである。

仮説 3：母親から情緒的安定を与えてもらうような親密性である「母親への絶対的安心感」が高いとき、母親が自分の意見をはっきりと伝え、自分と相手の意見の違いを表明し、他者の考えや感情を尊重するコミュニケーションを行うことで、娘も自分の意見をはっきりと伝え、自分と相手の意見の違いを表明し、他者の考えや感情を尊重するコミュニケーションを行う。そうすることにより、娘の自己決定感が高まる。

Ⅲ. 方法

2023年9月から10月に質問紙とGoogleフォームにて調査を実施した。調査対象者は、母親と死別または離別しておらず、大学卒業後の就職先または進学先が決定した4年生の女子大学生とした。回答者121名のうち、就職活動・進学の状況について問う項目において、「内定をもらい就職先が決まっている」、「進学先が決まっている」と回答した104名を分析対象とした。平均年齢は、21.67歳（SD=0.63）であった。質問紙の構成を表1に示す。進路選択における親子間コミュニケーション尺度において、「母（父）親」が主語の項目は「母親」に変更し、「父親」が主語の項目は取り除いて用いた。

表1 質問紙の構成

-
- | |
|--|
| 1. フェイスシート |
| 2. 進路選択場面における自己決定感尺度
進路決定における充実感尺度の自己決定感因子（神近, 2013） |
| 3. 母親への親密性尺度（水本, 2016） |
| 4. 進路選択における親子間コミュニケーション尺度
女子青年が認知した母親のコミュニケーションを捉える項目（以下、母親のコミュニケーション項目）、
女子青年のコミュニケーションを捉える項目（以下、娘のコミュニケーション項目）（高橋, 2009） |
-

IV. 結果および考察

IV-1. 進路に関する相談相手について

進路を相談する相手によって相談の程度に差があるかを検討するために、1 要因分散分析を行った。その結果、母親は、父親、兄弟・姉妹、先輩、その他の家族や親戚、大学の先生、キャリアセンター・就活エージェントよりも有意に相談頻度が多いことが明らかになった。

IV-2. 娘のコミュニケーション項目について

主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った結果、13項目 4 因子構造となった。第一因子は、話し合いの中で母親との議論に抵抗を示す内容からなり、「母親との議論への抵抗」と命名した。第2因子は、話し合いをすることなく、自分で決定する態度を示す内容からなり、「相談なしの意思決定」と命名した。第3因子は、親と自分の意見を確認し、不一致があれば調整しようとする態度を示す内容からなり、高橋（2009）に従い、「議論による立場の明確化」と命名した。第4因子は、自分の意見を主張せず、母親の考えに従う態度を示す内容からなり、「母親への従属」と命名した。

IV-3. 娘の母親への親密性と進路選択場面における母親のコミュニケーションとの関連についての検討

相関分析を行った結果、「母親への心づかい」が高いほど、母親のコミュニケーションの「結合性」、「独自性」が高いこと、「母親への絶対的安心感」が高いほど、「結合性」、「独自性」が高いこと、「母親の価値観への捉われ」が高いほど「独自性」が高いことが明らかになり、仮説 1 a、仮説 1 b、仮説 1 c は一部支持された。

IV-4. 母娘間のコミュニケーションタイプが娘の自己決定感へ与える影響についての検討

階層型クラスタ分析（Ward法）によって母娘間のコミュニケーションタイプを分類した結

果、「母結合型議論群」、「議論回避型自己決定群」、「母低結合型自己決定群」、「自己決定葛藤群」、「議論なし自己決定群」、「議論従属群」の 6 群が抽出された。

次に、各群が娘の自己決定感に与える影響を検討するために、1 要因分散分析を行った結果、「議論なし自己決定群」は、「母結合型議論群」、「議論従属群」よりも有意に自己決定感が高いことが明らかになった。「母結合型議論群」、「議論従属群」の母親は、議論を行い、自分の意見をはっきりと示し、「議論なし自己決定群」の母親は、娘の意見を尊重するが、議論をせず、自分の意見を示さないことから、母親が自分の意見を示す場合、娘の自己決定感は低くなり、母親が娘の意見を尊重し、自分の意見を示さない場合、娘の自己決定感は高くなると考えられる。また、「議論なし自己決定群」の娘は、「母結合型議論群」、「議論従属群」の娘より「相談なしの意思決定」が有意に高いことより、娘が自分で決定する場合、自己決定感は高くなると考えられる。したがって、仮説 2 d は支持され、仮説 2 a、2 b、2 c は支持されなかった。

IV-5. 母親への親密性、進路選択場面における母娘間コミュニケーション、娘の自己決定感の関連についてモデルの検討

モデルを検討するために共分散構造分析を行った結果、「母親への心づかい」は、母親の「結合性」、娘の「母親との議論への抵抗」「相談なしの意思決定」を介して自己決定感に影響を与えていること、「母親への絶対的安心感」は、母親の「結合性」「独自性」、娘の「母親との議論への抵抗」「相談なしの意思決定」を介して自己決定感に影響を与えていること、「母親の価値観への捉われ」は、母親の「結合性」、娘の「母親との議論への抵抗」「相談なしの意思決定」を介して自己決定感に影響を与えていることが明らかになった。よって、仮説 3 は支持されなかった。「母親への絶対的安心感」が高いとき、母

親が自分の意見をはっきりと伝え、自分と相手の意見の違いを表明し、娘の考えや感情を尊重するコミュニケーションを行うことで、娘は議論に抵抗を示さなくなり、娘の自己決定感が高くなる。また、娘は議論して決定し、一人で決定しないため、「相談なしの意思決定」が低くなり、自己決定感は低くなると考えられる。

娘の「母親との議論への抵抗」は、自己決定感を阻害する要因であり、「相談なしの意思決定」は自己決定感を促進する要因であることが示唆された。また、「母親との議論への抵抗」が自己決定感に負の影響を与えていたことは、女子青年が母親の話し合いを避けることは、アイデンティティの達成と負の相関があるという高橋 (2009) の結果を支持していると考えられる。

IV-6. 総合考察

本研究の結果より、娘が話し合いを行わず自分で決めた場合、議論に抵抗を示さなかった場合、娘の自己決定感が高くなることが明らかになった。娘が話し合いを行わず自分で決める場合、母親が自分の意見を示さない関わりが重要であると考えられる。一方、娘が話し合いをして決定する際は、母親の娘の意見や感情を尊重する関わり、自分の意見を示す関わりの両方が影響を与えていると考えられる。

目的3において、娘の「議論による立場の明確化」が自己決定感に影響を与えなかったことについて、「議論による立場の明確化」では、娘が自分の意見を主張したり、母親との意見を調整したりした結果、母親を説得できたかは不明であるため、影響がみられなかったのではないかと推測する。そのため、意見を主張したり、意見を調整した結果にも着目する必要がある。

V. 引用文献

神近裕樹 (2013) 大学生の進路決定における充実感と関連要因について 九州大学心理学研究, 14, 97-106.

水本深喜・山根律子 (2010) 青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味：精神的自立・精神的適応との関連性から 発達心理学研究, 21, 254-265.

水本深喜 (2016) 母親への親密性が青年期後期の娘の精神的自立に与える影響 —「母親への親密性尺度」による検討— 青年心理学研究, 27, 103-118.

永作稔・新井邦二郎 (2005) 自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討 教育心理学研究, 53, 516-528.

岡本遥 (2018) 青年期における心理学的自己決定モデル構築の試みに関する研究 花園大学心理カウンセリングセンター研究紀要, 12, 45-55.

奥村弥生・森田愛望・青木多寿子 (2019) 大学進学時の進路選択における親の関与と進学後の自立および適応との関連 心理学研究, 90, 419-425.

桜井茂男 (1993) 自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度の試み 奈良教育大学教育研究所紀要, 29, 203-208.

柴田利夫 (2000) 青年期の対人関係 藤村邦博・大久保純一郎・箱井英寿 (編) 青年期以降の発達心理学 —自分らしく生き、老いるために— 北大路書房 pp.56-74.

杉村和美 (2001) 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求: 2年間の変化とその要因 発達心理学研究, 12, 87-98.

高橋彩 (2009) 女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, 17 (2), 208-219.

牛尾奈緒美 (2005) 大学生の就職活動と親子関係：ジェンダーを視点として 明治大学社会科学研究所紀要, 44, 103-116.

渡辺恵子 (1997) 青年期から成人期にわたる父母との心理的關係 母子研究, 18, 23-31.